娘太平記三編

上

へ13
4449
7

ハ13
4449
7

娘太郎記第三輯終

大青貳ぎ。身ハ倩くもて時を待ち。命ハ
ちてふ一所いふ。こ爲ての極言ちさくて事ハ
聰ハ慮知ゆ生まれ。語大命なまバ本意をしい遂ぐ
ちて年筑波仙橋ゆ文学の道ハ賢くて。弱冠ゆて
文字ハ稚ちて。さまバ其学四才不消えて。書ゆ

千里の志を以一脈ぎ読て書を上梓みもて其味ひ、
時々戯墨を好で和漢の故事或ハ人物の形を画き
しとの見聞の冊子を繰ふこの人もて是を知る事
良其名を表し或ハ一文金自楽び或ハ同志
山人由山人の数を摂して人情世態の浮世冊
子を画て世の洒法大ら形ぎ俗人ありしが

鳴呼惜し哉不幸にして早く黄泉のやうに
赴く然るに世草子も初輯より第二輯乃半に
もふ思ひ遺稿を編んとて畫肆の執
心なく上梓せんとの思ひ金部よいまだ
拘泥余年を経て委わらず同志諸子
知己ならん。牡丹亭儘に閑人を煮ら。故

人の知らぬ所にて、新しき紙を
中巻に書附しが、僥倖の事にて
よきて自作の微章、此の葉の蔭の
秋とも、やうやうまこと香ゆ、遠国
特を入れ歌年、豊年の時よりて、何ぞ
序文、書舞が需ゆる。特の果屋を手

昭和辛巳三月ノ二

俳半二年の表紙に題さる
黄陶子
己亥の雪篝
杉の一本人の頭

蒲焼
ちんべ衆
お角さま

でんち
竹智ふ聞こる姙婦が
舌頭并いとこなせいと苦き
その口あてうハ鱣ふ
ゝまされり

猛太平記三十四

娘太平記操早引第三編巻之上

東都　松亭金水編次

第十一回

勝うてに敵りぬ技ぞ吾この竹と六古人の秀吟あり。実ふ人情をうつして。よく云悟へしり。吾は海ふ竹へ法ありてその竹のあんとするめぞ技りて竹をうち。横ふる吾に紙をうひく。竹の吾るるうんを紙欲すしるり。人の歌のもろこ吾ふるるで。吾の吾ふき紙乃て見を歩遷すい。一点役も

この死きわめあらびそのあを沒めをふ移しそのみの
一生を安穩ふ過らせ人ふも賞さ世旦まさ祝も安堪せんと
の心めらこと慈悲の慶たる不ものび人のみる者ハ
その祝の慈悲を味よおめらずめ御さるまとあり
とも祝を怨まどして分の行ひを顧て死さ後改め
ぜふ進むべきふ然ハちらしてその祝を恨ま出り却く
やけふるりて善敬為をす果ハ祝を捨て他人ふ
分の氣法をすして祝の苦労とも顧こねのあり是等の

歎ひハ面こそ人ふ見心い獣ふ等しと云んふ沒上の將女
幸男ふこの祝を聲こて人獣の過ふ生きのふ再流
八百屋のまふハお千代を連て男人入ふ孫者を供ふさ
ふ。出羽の傳ふ出ふこと話てそこらと歳を涙を拭
ハ
お千代今沒めて云でもふいが。ふ方を拭ふ世ふ
ふ。夫婦の中も膝ふうすで水ふ湯ふさを締り。南ひふ
籍出す面へ。私も大きふ者姑して。店のふ多ふハ横ず。
念仏海ふ実ふ入ふ。で後生一ふ味人ふも楽ふ身の上

きのふけふ。今日。其外の私りふ用果ざ申。このだろ
んいえ。ふしもせんだ。
ゆまこ和めが不可相千万。私ざ云のハ遠慮もあへがたまこでハ
なへこと。
無義おろうこと。ろの公ともを思して。こ方ふわ〳〵云含め
かけ
ん。
ん。
ん。

挙動。なるべく手柄を立て仕ようとそんねんが
私ごとでも思案の外で貴も猶も波乱だろうか。おめでと
心の狂ふもの。万一まさか伝右衛門と文吉の取持でもしとるが
あって人目を忍ばねばならぬ。よいよいの恋の紛れ。程と伝右
みよつて。俗に大人しい方まで。なかなかあぢなまねをする。
お千代。私が女の癖しまで。良人がありながら浮気をする。私も
箇様仕ます事。あて人目を忍び世上の情。なほ一ぐるわの軍さも
うまく定めなまてる捉ぐ淋ぬ。女いな女の乱があるく。乱俗なる

ぬの浮世のるゝひ。主私を殺ゆうく無まつく。喜久次郎をもよく
惚へ。踏まぐさねを貞女といふぞへ。たた私いふさう見の異員
をする。郷父ぐこ。ろみう郷ねが私いたれしこ若でいるの。十方
も見ひ郷ってる色り。金ハ金。石ハ石。氣ハ氣でも他人でも。
ち中
長兵衛ようなって指ると沙汰。伝吉の猫。お千代いるふ
美へ。色紙。金美の紙とい人だえふ。ぞふいふ狂う伝右衛門。家文
伝吉ふ遠ひのい。連てく行う。別へ。ちき。会吉ふの役も金吉
ゆうび。文中へふこそ拘置ま。春山ふまでも絶ぐ。つま。ちく郷

どくを解くも。亦にだろうでおの浅を。ゑるようる行者の間
果いぐいせんと女乳ふ。胸も法恐乳も秘上。で年代くく
夢ゑるく。泣より分ふ法方も。満ふ漂よふ捨ふ糸。風ふのま
るわくなり。良あつくく乳を沉め。涙を拭て起あがり。春山
の傍へ猿すりよせて。ちへ〳〵どんくのお泪ハ。逸〳〵独うくゆの解
まし〳〵貴君のお親ひ捨だんのハ。生もれ。知らんでゐるのませんが。
ゑんで私が不未でも。そまるよく矣まつく居ます。こゝへ入ん
人七人の。妻をお伝ひ。きらうとも。まくハ順女や田女。ハ不の

浪ゆと寄ぬ。あさりませうとも。乳源ハ女のゝうるゝ。
〳〵丈ゆ。弟之の。破滅みでもありまん。沼ゆ。美ん〳〵ハ指前
のるゆ。早美ゆ。さび私の。お身の仕ゆうが。伴ゆ。花ゆ
出〳〵。お乳ぞら〳〵と。ゆさるゆであらうと。ゆと。を若方ふい〳〵
〳〵ね。ゆ〳〵。彩〳〵ふ。ひまゆの。孩を之のとゆるハ。一点
るゆゞもゞざりませと。ゆ〳〵。伴者と情合がある。後ゆの文と乳
見ゆ。ゞ。淡でおゆの世ゆまつとのハ。美ゆも知〳〵ね。ゆ。乳源
ゞふいゆるゆ。解りません。とゆ。〳〵。ゆ。ゞ。ハ伴者ゞ。ハのるゆ

月日の光の清らかなるも
ちぐさに暮るる
秋のなごり哉

ちゝ親へ事ゝ。爺文と者ゝ不遠ひうへと。かて足とびうかのを。
若旦那のお孫さん。おとゝ内ゝ先ゝ。いつゝ云はれ私が。隣の
うちと。ぎうり。波ゝけゝ下さいまゝトいふも涙の雨ゝ〳〵裏
つまゝ〳〵せて。妻ゝ〳〵むゝ。ま六い長脇て〳〵。ゝる程ゝ。ゝ
ゝ。ゝゝ。ゝけ足ゝ。伝表が。伝表ゝ。ゝて足足ゝ。横合ゝ。ゝ
でいあるまいゝにも出さ足ゝ。虚ゝ実紙ゝ表ふ。紙さゝと
いへゝあの内ゝ。私も一番ふ孫と。ゝゝ。不義淫毒ゝと。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。この爺文ゝ合点ゝね。お個ゝふ滝

を掛けて。親縁不へ表出さゝと。ゝ。ゝ怖ゝゝ。ゝ虚ゝ。ゝ文
でもゝゝ。ゝ。ゝ。

なりまんといひうみて。歯黒かけまこのやうにと手伝へ
コレサ　お千代。こゝを移ふ法まへ。その才さへ清浄なり。況のこと
時の沙のあるいへ。御るゞゝて不義淫事と名のこゝろ流を完
へて。こゝとまへ。勝ての分あるゞ。姉といふまへ妹のて長兵の
ゝの長崎にて。の不ふ居るゞよへ。不肖なるゞ氏家父が。万事者
色で居るゝへ。こゝ方の悪へゆゝふもせど。彩の祖ふもなぬ
ゆゝに。約め方ハ家作もある。サ早く教でも逃ーて。なくそ
なゝぬこゝ。ゝの。ゝえの物をとり物へマアく悩く泣て居るゞ

いつも豆腐ハまこゝ知つゝの通り。自己と遠ゝく女なのゞゝ。孤も再いも
しゝ。ゝ。ゝ居るゝ。ゝ。ゝ。

かめく。今ぞるもまつと蒸物なり

知くて欲望も茶りけるべ。お千代いまを見昌とさて

茶め。信く恭山ふ喉を乞。何のうのこ式細くと。特色て

豆出り。利益も大意の回面菩薩ぶ。湯とぶさ人特

如しまさ。地内の旅ぶ方ゆまさ。おびしい名ぶ世の中の。

茶も信くまさも時邪ぐと。幾明てもるが形まき。弟の

成果を卿るべし

猿貴のうへ式猿ぶく死えるとこ時人の初る長茶ぶ。悟

の道の一句いあまぐと。そまえ式。暗らぬが浮世の楽くと。悟りく

つまえぐ東西もなく。ぶまえ茶ハ先刻ようお玉と面対せ。

ようぶ取ようぶ合の押へと。何の風情もなく式酒茶ふいと蒸し

ろ傍ふわる。湯飲をさらく。「コウお玉一杯飲でくれる」「エ

そまえでおとりうへ。おうまいナれ。お茶ハ何ろ玉飲ざ

まうで。傍ふのく沢山おとりざョ。まと酒で昔しいうへ。モウ茶よ

ものるまいナ。「ナニサ豆うへ酒でくれるヨトお玉の茶へ湯飲茶

猿を実ぶられぶ。お玉ハグイとうと。「猿にふおしる

ちいヨだらしい。けれるあで腐と偽度ハね〳〵。ヲまさん。お茶私
何ぞ私ぞ気ふい〳〵ものいるもても仕ものゝ〳〵〳〵ぎ〳〵ぎも
あいりんぐる。先刻〳〵ものふ引絞んでねとおちで。そして例
と遠ひ〳〵何ぞ何ぞ私も脳でもうてお立のやうぐものヲ。何
も故さ恵ひ〳〵ものゝ新よ云のしやァあいげみ。私の不足のハ
えを風ねしておちでうふ。何のるとうァちゝものいがちとが
ろうァ悪りいと。お付てものてお長るとハナ。そしてやァお茶れも
私のあるふまかでもるくつて。洗ふ他人ぐほい仕ちぐとるふヨ

ま〳〵ヲヤ異なる気云のふお前よ生てこのめふでもるいるハ
る。まと自己も何のもも若ねぐ。そりやァ絶人易ぐそ気
仕も云こちら。り気ふ変つとるぐるこう張ぬしねく。ペン
家ものそ私みて気云ぐ時分ぐらうト波の一名をお〳〵ヲやまさん
何ものこと。ものる私云出す時分ものるてぐぬいまを立
ま〳〵エ。ハテサ何でも立ハナ付るのるヨ〳〵ふの敵残ァ遠ひ
まもすこと。何様も私きやァひみやァるりませんこ。生刻ろ
の仕あといひ。まと私お云るるのとこちやァ。併でちやく

川さんでもなくて。私の気ぐ高つてさうでもなくお左のうへ。
あれ名はなちやア知らないわへ。成るべく長毋めでも仕方でも
て居るなもへ。お蔵の来るのへ邪魔やア何ぞう蓆寝とうく
ぬ毎ごとくるみ去るくりて。わるい長毋みエて出ない何紙深あ
しして居るヨ。気振でも仕さのうと。ぜうとるるるのへ毎ヨあるへ。
その信よ名川さく居るもの紙。お茶杭もアア俗まりしやアるいるよ。
大うとお千代さんみぜ云をいまして。モウ止気ふお放ごろう。何
うふ振をすげく。気無るゆうるる紙おいごろうが。私さも

ひ考つて彩るうさうゆやア。死でも新しへ仕るへらく。あ杭
ろうく。お長みさんトまを彩ぐ杭を足つあ見べ。まさ作まさ
もうそのお千代さへ歩いて世へて。行ぞくふと面白くもれ
へ。あ杭サまさごう世内家さんのやうみ。面白くるへのサへ
子との女ア俗杭しへが彩しみと。ようく仕爺ちべと喝るるア。悪
月みぐ寝て居るさうご。「アイ私きやア寝ごろく喝う
まさうョごみせ世るあくびのお振さんが。杭振みを本とのとて
遠みのサまへチョッ長くまへ爺らごろごの人の気もありやアごう

わ〳〵でト泣く〳〵敬ゞる牧口の酒をおまゞ徒〳〵投つけ。是ハ素仏
ゑへ
ゑ板ぞくりゆふ。旅千代ゞるゆの胸ゆありて。ふその怒り鮮やゝぞ。
お玉ハ敬ゆそのゆを。抜手寸且一どもをちゝゑ体ゆて。河の中
に丑分合〳〵。男の人ゆ戦人ゑ。或ハ嫌如の紙をゆて。男を
為ゆとゆ笠の蛇蟒ゆ廃者ゆ知ゆ

第十二回

岩下お玉ハ敬とゆ〳〵。眼分閑ゆ〳〵まて。ま〳〵を向
眼つ付のゆ〳〵チヤゆ麻く〳〵い敬手ちゆ。ゆ〳〵ても

よのお玉さんハ。ゆ敬ゆ抜柄で汐のゆ〳〵やアゆのハい。ゆへゆ〳〵ゆ
ゆ〳〵ゆ。敬ゆ。ゆ〳〵ゆ。ゆ〳〵ゆ。ゆ〳〵

羅漢様が来ると、ものしやアございやせんか。陽まりお中が
丁度いまちやそーて、ちやうきて、焼まで。ちへさえぬ国のうち。
百ぐ〳〵、ぢ様な酒肴もねへ。もんざ〳〵、まへ、見ゑ八例もく
げんき。えく来ざ。ア百姓なもへ。ちと二ち茶の板ふ乳を持て居さう。
くらう。若ア方ぶ多くりて、見らうねへ。そのゆり、今まうさ来り。
女ゆい駄目。義ちゃ牛の廓先ふ。ろ法つく居板とふのざ〳〵
ドレ一ッ頂ろうトつゆ打ま来ゆ。彼と三ぐ。ち涙く切。見八ゆ
と使やて〳〵。今ゆい見ちゆ行板ろ。ちがさのくゆ。ハ玉ゆ〳〵ぎゆ〳〵チットト

完小様金があるりゆサ。見〳〵フム。ち板ろナ。ゆく〳〵。行ゆ。ど〳〵戦
ざ。出ーハ行板ざらう。ゆ〳〵。お茶ゆ初ゆて。ちゆ。ち来ゆ。ち来ゆ。行ざろ。ち乳む
づろーいハ。ち丈ざろう。義板ゆ行ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ち板ろ工。
つひ。ゆ。ろ。ち。ろ。ち。ち。ち

どうぞじんな　き　あの
行幸旦那の気を迎させてお呉るへ　それ　ハアち私らも。行私いふ位細う
ちゝるのいが。イヤ全くお出さんの辟ざらう。ぶうも山旦那が混ちやア。
そんな　やが　ちゝ　ちゝ
ちゝ私小野茶屋が後をうさりまさ酒ぐ蔵をお色あんぞといふるへ。
つも　あり
瓜の嫁ゐどもるのいお方ざすのも。夫ともまさ出さんが。他よ腹件
と　そこ
ちゝるのでも仕るすの。とうア云ちゝるのが。通方ハ旦那が着ッきりと
いふあんざちゝ。夫もあるまいし　それ　むこ　ハアレサ石ゐ長さんざれへ。そこ　私な
と　ぞ　それ　ざ
るぞちらびみも出ゝそお呉ざるの。染よ石紀宝面ざん　長へヨット
それ　あり　そん　きざ　あり　ざらう
夫ざちゝ云へ。まいとふのサ。まさ。さ私な肌合ざ。そて洗ざらう。

どんな　こと
旦那。ちゝまうも私らでめ。お味方をうて。ぞ水攻ざ。ちゝまうぞれ
ら　けち　ぞん　ざ
笑れ交ゝて。お妻ちゝるのまへ。山猿ちゝを。ちの　うんと
いふじざん　そこ　ちゝ　ざ　ざ
云内ちゝうゝて。その別業とふ。ウお出さん良已ざちゝざらう。夫
そこん　ゝ　いく　きく　ちゝざる　さん
アやア猿紀ちゝ。武業の内ふ初紀が。ちゝ。武業の内ふ。
どう　ちゝ　ちゝ　ちゝ

家業の時分初発が咲く。実ゝ家業のさいふ分の私しゝ。そ
れ代代なのてんを〳〵ゝかの講釈所が所人の所へいゝ。ゝ
明暗とゝゝ。家代〳〵ゝ世ゝゝ紙で〳〵ゝ三さん。ゝかゝ滅ふゝ
分も私の一代記をゝゝべゝゝのいでも紙ハを〳〵ゝ十九やゝ代業
で一代記もねゝんゝ。ゝゝ代記伝ゝ所ゝゝ半〳〵イヤその優ゝ
ゝ代記でせん。稼ゝゝゝ家業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ねゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝでゝゝゝ。私きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ私さゝふゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

口説のうちに針灸
はくこそ男冊勿まん
なんの
婦ゞ達汗

ちゃ。まくらの方のたうりが出不無とうる。ハテ世間ち
ゆ。ふるうれ。実ふ英雄ら弟びこうどで。巻角元病がするみやア
ぬ。ヒ「ナニサお茶いおちりでこのいけで。ち刻ゝ見れるとなる
いづめらとうゝ。見ゝまと見拍をいづめ匹して上るくいちやア
ま「女ガ立れ上ろ長ゝ立ものもれれ廃ふゝゝ「エモ置ーの
何とびもお云。ぞう世お茶ゝのにみやア嫁いるのうゝ。世方い
ぞまを云て酒でも呑ゝりが豆ハトお玉いを破て二ゝ云。縁ゝ
の長ゝ上ゝ長ゝ。完ふと笑ひるぞゝ「コレサ坐てるち〳〵ゆ。ガ

いるゝ。ぞやァれ〳〵ト指ゆを引〳〵ゝる。お玉ハアレヨトその拍臣をれ
ろへさんと立ゝ成ゝ世び。れらう者ゝらゝ世分引分。長ゝて
相撲ふ矣ちゝゝ。お玉ハ負じゝ力をの立て。おせびたるゝさゆ
倒ゝ立ゝゝゝ。押合ふゝゝみむゝろゝと。お個一勢み倒る
ゝゝば。遠ゝれ長ハ押入より。蒲団を出ゝて引被せ「サア中
ゝりハ酒ゝゝ。仲人の役ハ俵長ハ。ゝろうり頂ゝみやアゝり
ませんト押へつけゝゝば「アイゝゝ。長さんゝ後紙ゝてお長ヨ。
アレサ息ガ詰まるハよ長「そんゝ見ゝゝ坐でも。子長空空を俵こ

あーごョ。「もウ〳〵温くなッて」「長一寸程ある〳〵紀ーてあげやせうト
蒲団をまくるとまづ初あげる。お玉ハ髪を掻あげるなら「玉へ
お前ハよウくあぎらけるヨ。髪をぐいぐいふきくスナ勝らしい」「長
〳〵文吉宅の仲人ハ。淺で勝まと」「例のサ」「玉へそれ
ちて強く押付るものヲ」「サア息強ふ一つおきるせへ〳〵〳〵
「ヨヤまさんい赤ッよ長るのウノウ。淺せと赤るの。エ。まさん」「長
ちゃ淺戸ハ紀ちゃヨト搖ぶる」「〳〵〳〵ア空紀ーておいて
長る」「長〳〵ちゃ紀ーてお赤るせへドレ私も淺やせうト

ちゃあぐる。ひと紀蒲団も淺り来り「やく」「見ぬ」「ぐまさ」「砕ち茶
ちゃ」「蒲団」「戸ちゃ強く」「お長。私も長るちゃト例のとちゃり
と」「戸締をちゃ。毎ハ二階へ行け見べ。お玉ハ半ちゃ紀ーてく
「サア」「あんちゃりれお長ヨ。乱を引ッる」「〳〵引ッ」「ハ淺ハ
「もち淺つとヨ。サア一ぷく」「吾で風をお見ー」「空ぢゃり長さ
ちゃ。ア強風ふ砕さ」「行ちゃ紀ーてあへが赤長でいあぢゃ
ぢゃ〳〵サ。私きゃアまさを破紀ーて強ぐ西ちゃ。一白砕ちへ
アはまさんおまへ長えゲ赤川ちへエ。エ。「行のるさ。自ちが

行ぞ後でもこちやア仕めへ〜丈でも先別ハ行ぐら後を
ゐてお立ゝやアあへう。丈とも手ハ私ハ跑とのゝ〜。お茶ハ
お跑でも私の方ゝやア跑あへヨ。まゝかりごらうけ。ど。お千代
さんといふ方なる内家さんの立のと。ゐ気で居と私ぐらのを。
こゝ私なる所ちやアありませんゝ。お茶私も方私
ゐ門でお呉なさい〜。自己ぐらでも行も浮落ゝやアね〜。何も
いゝ事ハ。お千代ぐ置ゝいのを云やア。彼き出てお茶を
宅へ入まうといふ位ざのヨ。ゐ〜〜只浮落ゝ〜〜ね〜。

行ぞ私でお茶私ぐアア可愛ゐて後千代さんを出て私と宅へお入
あまるものゝ。こゝ私なる気稼ハお方ぐ呉ハ〜〜ナニノ法ゝ
ね〜行のあふ気体ゐ成云ゐのう丈ゝ〜お宅へ入まうと行私
するゐ〜行私も方ゐへけまぐ方私ゐうやア私の本をぐゝ
手ハ犯でも立ハ方ゝ〜〜ゐ嵐ぐ笑ふぐらう。ゐ〜〜
旅千代さんをこゝのゐて立ゐるぐ宅。ゐ〜て退座ゝ〜
時ゐやアこゝ〜もれ出ゐさゝ〜〜ゐ〜〜ゐんぐゝふと。お千代
おちよとゝけまで。自己ゐ私ふ浪浪ちやアゐ居ね〜ぜ。それふ

あゝ
波奴が悪いと云ふ訳にもいかぬ。自己は縁を切て仕舞ふと分解い
たらどうゝいお玉と合ふる下心あて。ふゝ川と実が入べ。
お玉いお玉が哭を合こまづゝ九分通り在言が耳く仕て欲
べゞ。拵えて物りせ一容が目めく「エヱ旅千代さんが嫌奇
をしさとく「左様サ」「行紙坊ゞ」「アそりやアあとで
和とるふる」「そ〻て当一て仕巴のゝ」「左様サ自己
事が抜き出さゝこ品川さけゞで爺父ゞ行ゝ了法がある
くいつく帰ゝて来ゝ。爺さんが仕一て亀さのス「夫じやア

爺さんが仲人ゞ約ゝごゝゝう「ゝる事アこと云ねへ。代のゝこと
遠ふふる」「左様サ」「女いどうも夫ゞゝちやア駄ます
「お爺ゝ自己が宅へ遠入くゝゝ。代の郎が遠敵ちやア
ゝゝねへせ」「ヨヤ私きやアこ様な浮ものとつゝるゝねへ。
可愛そうに。お前様と遠様ゝゝゝ。ホン三嗅の通り旅
猫でも抱ゝるがあります。ものを」「附て居ねへゝ
行様ゞゝ和とやアーねへ」「附て居て せへこと様なもとゞ
出来るゞやアるいゝまあ」「コレサ左様ひるませねへでも宅

ぎやアねへうを「ア」左様ぢやアるまいョ。何でもよウく気みが高
ぐねへま「ヲット洪まりく」を一左様ぢきを聞ふあるとておくんな
きりやア。実ハ可愛いつョま「アイタ〳〵」エ了ひどいことをする女ざ
ドレ」はて方でも考へ敷してやらう　わるくも弁を勤る一人のこゝろ
きゝ様ぢやアて浦〳〵とふけこゝろ

娘左手花之巻上畢